様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年６月１２日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007-2008
課題番号：19530488
研究課題名（和文）重症心身障害児療育史研究－重症児キャンペーンとおばこ天使－

研究課題名（英文）A Study on History of Children with Severe Motor and Intellectual Disabilities(SMID) Focusing on SMID campaign and “ obakotenshi

研究代表者
細渕　富夫（HOSOBUCHI TOMIO）
埼玉大学・教育学部・教授
研究者番号：１０１９９５０７

研究成果の概要：本研究は、重症児療育史研究の一環として、重症児問題の社会的受容に重要な役割を演じていた新聞・テレビ等のマスコミ報道、いわゆる重症児キャンペーンの実態を分析・考察することを目的とした。「おばこ天使」とは昭和 40 年代に秋田県内の女性が東京や大阪の重症児施設へ看護助手等として集団就職していった際に秋田魁新報により女性らに名付けられた名称である。この出来事は新聞各紙に大きく報道され、重症児へ愛の手をさしのべた秋田おばこの人間愛、美談として全国民からたたえられた。しかし、こうした報道は重症児療育における過酷な労働実態を美談として覆い隠す役割も果たしていたと言える。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	１，０００，０００	３００，０００	１，３００，０００
２００８年度	６００，０００	１８０，０００	７８０，０００
年度			
年度			
年度			
総　計	１，６００．０００	４８０，０００	２，０８０，０００

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：社会学・社会福祉学
キーワード：重症心身障害児　療育　おばこ天使　小林提樹　障害者福祉

１．研究開始当初の背景

重症児療育が始まって約半世紀になろうとしている。この間、重症児の福祉サービスと教育条件整備は大きく伸展してきた。また、重症児の暮らしも施設療育から可能な限り地域での生活を支える在宅サービスを利用する方向へと転換しつつある。

近年、初期の重症児療育を担った施設関係者が少なくなり、初期の療育事情等について関係者の証言等をきちんと記録し、整理・分析していくことが急務となっている。本研究はまだ未着手となっていた重症児療育の社会史に取り組んだものである。

２．研究の目的

本研究は初期重症児療育史研究の一環として重症児問題の社会的顕在化とその受容に大きな役割を果たした重症児キャンペーンの実態について、特に「おばこ天使」報道の実態について分析・考察しようとするものである。

３．研究の方法

昭和 30 年代のマスコミによる重症児キャ

ンペーンについて国会図書館等を利用し、新聞主要３紙及び主要雑誌について記事検索を行った。これらの記事を掲載順、内容別に整理し、どのような時期にどういった内容の報道が行われたかを調べ、その傾向を分析・考察した。

４．研究成果

（１）おばこ天使の始まり

昭和 40 年２月６日付秋田魁新報夕刊「秋田から看護の手を　東京の島田療育園　入園待つ重症の子ら」という記事が掲載された。これが、その後のおばこ天使報道の始まりである。この記事は、おおむね以下のような内容であった。

東京の島田療育園では職員の退職者が多く、職員数が定員１００人以上のところ、76 人しかいないこと、収容ベッドは 169 床もあるのに、入園児が 112 人しかいない。そして、秋田県中央児童相談所がさきごろ島田療育園に新規入園希望を出したところ、同園より「人手不足で引き受けかねる。看護助手１人をあっせんしてくれたら２、３人は…」との回答。そこで佐々木児童相談所長は「重症児が“座敷牢”に入れられ、同時にその一家も暗い生活を余儀なくされている現実は見るにしのびない。だれか奇特な人は……」と、祈るような表情で求人に走り回っている。

看護助手の仕事は食事、入浴などの世話。県内で看護助手が見つからない場合は重症児の入園も不可能になるので、今年度予算に計上されている入園補助費 24 万円（２人分）は全額返上されることになる。

この記事に対する反応は早かった。わずか２週間で 15 人もの応募者があり、このうち 13 人が３月 30 日夜、秋田発急行「第二おが」で上京した。この 15 人は 18 歳から 22 歳まで。大半は高校を卒業したばかりであったが、中には看護婦も２名含まれていた。看護助手は 13 人とうことになる。これらの女性は島田療育園で働きながら都内の各種学校、専門学校に通うことにより、准看護婦、正看護婦、保育士等の資格取得することができた。

（２）おばこ天使報道

障害のある子どもたちの療育に携わろうとする秋田県内の女性たちの集団就職は全国的な話題になり、連日新聞各紙の報道が続いた。現地秋田の秋田魁新報ではつぎのようなの報道があった。

《1965 年３月 31 日朝刊》
厳しい天使の道へ　島田療育園に娘さんたちが出発

《1965 年３月 31 日夕刊》
関係者の歓迎受け島田療育園に勤務　今野さんら東京着

《1965 年４月８日朝刊》
張り切る秋田の天使　島田療育園早くお友だちに　子らは“愛”を求めている

《1965 年４月 10 日朝刊》
秋田娘の美しい波紋　善意開発への道

（３）おばこ天使初年の動き（渡部誠一郎氏作成、一部改変）

おばこ天使は秋津療育園などにも就職しているが、ここでは島田療育園関係分について整理しておく。

《島田療育園関係》
1965 年２月６日　秋田魁新報夕刊に島田療育園の人手不足が報じられる
1965 年２月 20 日　秋田魁夕刊に希望者 15 人が中央児童相談所に申し出たと報道
1965 年３月 30 日　13 人のおばこ天使、秋田を出発
1965 年３月 31 日　おばこ天使、東京着。厚生省を訪れ、関係者の激励を受ける
1965 年４月 10 日　花輪ロータリークラブ、おばこ天使に強度人形を贈って励ます
1965 年４月 22 日　秋田県知事小畑勇二郎夫妻、島田療育園のおばこ天使を慰問
1965 年５月 14 日　秋田県精神薄弱者育成会　「島田に就職した秋田娘の意思を生かせ」と知恵の友エンピツを売り出す
1965 年６26 日　島田の 15 人励ます運動、県下にひろがる　山本郡二ツ井中ではＪＲＣが「オムツ１枚運動」展開
1965 年７月２日　二ツ井中ＪＲＣ、五百数十枚集める
1965 年７月３日　秋田市婦人団体連絡協議会、おばこ天使にもろこしとタオル贈る
1965 年７月 25 日　島田療育園小林提樹園長　おばこ天使のお礼に秋田を訪問
1965 年７月 29 日　鈴木善幸厚生大臣、俳優の伴淳三郎と島田を視察　小林園長　秋田県中央児童相談所で 60 人の心身障害児を診断
1965 年８月 19 日　佐々木義武厚生政務次官（河辺町出身）　島田を訪れおばこ天使を激励
1965 年 10 月５日　第 13 回東京都社会福祉大会にて秋田魁新報の重症心身障害児キャンペーンに「社会福祉事業協力者」として感謝状
1965 年 12 月３日　本庄高校生徒会　愛のおむつ運動でおむつ千枚、寄付金 6000 円を集めて島田へ

（４）秋津療育園とおばこ天使

秋田魁新報は 15 人の上京後の生活について「この灯を永久に　島田療育園の春」「……の夏」などの連載記事をまとめ、追跡ルポの形で細かく報道していた。その中で東京の秋津療育園でも深刻なスタッフ不足に苦しんで

いることが報道された。以下にその記事を紹介しておきたい。

◇　◇　◇　◇　◇　◇

重症児施設の秋津療育園でも深刻な看護婦不足に悩んでいることを知った県内の若い女性から児童相談所や秋田魁新報へ続々と問い合わせの手紙が舞い込んでいる。３月末、島田療育園に集団就職した 15 人の天使たちが投じた「愛の一石」は、今人間愛の新たな波紋を大きく広げている。

◇　◇　◇　◇　◇　◇

秋津療育園は開園以来看護婦不足に悩まされており、当時保母を合わせてわずか 19 人しか職員を確保できていなかった。このため 129 床の半分近くが空いているような状況であった。同園では「せめて看護婦さんがもう 20 人いてくれたら満床にできるのだが……」と嘆いていたという。

秋田魁新報によれば、この記事で問い合わせてきた女性は 12 人。大部分は昨年春か今春、高校を卒業して会社に勤めている人たちだった。なかには高校在学中、現職の看護婦もいたという。

秋田魁新報の連載記事「この灯を永久に　島田療育園の春１～10」（5 月 11 日～17 日夕刊）はおばこ天使の活躍ぶりを広く秋田県内に伝え、さらなる志願者を集める役割を果たした。秋田市のある女性は、「島田療育園に県内から 15 人が志願したとき、正直いってふんぎりがつかなかった。でも、その後“この灯を永遠に”を読み続けて、“おばこ天使”たちの喜びや悲しみを知り、これなら私もやれると決心がついた。青春を幸薄い四重苦、五重苦の子らに捧げたい」と述べたという（秋田県社会福祉史、1979 年）。

応募してきた 39 人中、選考を受けたのは 16 人。うち、10 人が合格し、7 月 30 日夜、秋田発の急行「第二おが」で上京した。秋田駅には来秋中の島田療育園・小林提樹園長も見送りに駆けつけたという。秋津療育園についての動きを伝える秋田魁新報の記事を以下に示しておく。

《秋津療育園関係》

1965 年７月１日　秋津療育園の人手不足が報じられる。

同年７月９日　応募者 39 人に達する

同年７月 20 日　選考で９人を選ぶ。一人はすでに上京。

同年７月 30 日　すでに上京した一人、遅れた１人を除く８人が秋津へ向けて秋田を出発。同日、草野時治秋津療育園常務理事は秋田県内の重症児を５人以上収容したい。

同年７月 31 日　おばこ天使上野着、厚生省にて鈴木厚生大臣より激励受ける

同年 10 月 22 日　秋津より県児相に来春高卒者のあっせんを依頼。

同年 11 月 20 日　おばこ天使の父母 10 人を秋津が同園に招待。

同年 12 月６日　秋津へのおばこ天使選考会、応募者 21 人、採用予定 10 人。

同年 12 月 17 日　応募者 16 人、全員合格。秋津 10 人、東京小児療育病院６人。

同年 12 月 14 日　県内の重症児５人、秋津に収容。

こうして、秋田魁新報の小さな記事から始まった善意の運動は秋田県内に大きなうねりをお越し、さらに全国民を巻き込んだ一代イベントとなっていった。10 月には、東京都社会福祉協議会から秋田魁新報に一連の“重症児キャンペーンに対し、感謝状が贈られた。

（５）その後のおばこ天使

島田から始まったおばこ天使は秋津療育園、東京小児療育病院へと拡大し、さらには大阪の枚方療育園にも就職するようになった。ただ、距離や言葉の関係で枚方との関係は３年で切れてしまい、東京小児療育病院も知名度が低かったせいか、昭和 46 年以降は応募者がいなかったという。

その後、島田療育園と秋津療育園等への“おばこ天使”という名の集団就職は以後連綿と十数年続くことになる。島田へは昭和 50 年代に数年途絶えたことがあるが、秋津へは昭和 53 年まで一度も途絶えたことがない（それ以降は調査中）。しかし、こうした集団就職も次第に話題にならなくなり、かつてのような加熱した報道は見られなくなっていく。

《おばこ天使の年度別推移》昭和 40 年代

年度（昭和）	島田	秋津	東京小児	枚方	合計（人）
４０	１５	１０	０	０	２５
４１	１０	１０	１２	０	３２
４２	６	７	０	０	１３
４３	６	７	３	０	１６
４４	１０	１２	０	０	２２
４５	５	１	５	０	１１
４６	７	７	０	６	２０
４７	１６	６	０	２	２４
４８	４	３	０	０	７
４９	２	２	０	０	４

（秋田県社会福祉史より一部改変）

おばこ天使のなかには、わずか数ヶ月で辞めた者もいる。介護労働の厳しさや環境の変化になじめなかったのが主な理由である。秋田からの就職者ばかりを追いかけ、取材するといった加熱したマスコミ報道も一因となり、秋田以外からの職者との間で人間関係がこじれた面もある。秋田おばこへの感謝の気持ちから小林提樹園長が秋田県からの“おばこ天使”ばかりを集め懇談するなどといった差別的対応があったと指摘する旧職員もいる。

多くのおばこ天使は２、３年で辞めている。10 年以上勤続した者はきわめて少ない。初期のおばこ天使のなかには、秋田県内の障害児施設や老人施設に異動した者もいる。過酷な介護労働の割には待遇がよくないこともあり、昭和 40 年代末にはおばこ天使は 10 人に満たないレベルになっていく。“天使”という美談でくるんで、労働条件の改善が進まなかった実態もあり、50 年代には島田の労使関係が悪化し、ついには小林提樹園長が辞任に追い込まれてしまった。若い秋田女性の善意に頼っって維持されてきた日本の重症児福祉施策の貧困が招いた象徴的な事件であったと言えよう。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計１件）

①細渕富夫、重症児療育（教育）実践の動向と課題、障害者問題研究、36(3)、12-19、2008 年、査読なし

〔学会発表〕（計０件）

〔図書〕（計１件）

①細渕富夫、重症児の発達と指導、全国障害者問題研究会、1-128、2007 年

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

○取得状況（計０件）

〔その他〕

なし

６．研究組織

(1)研究代表者

細渕　富夫（HOSOBUCHI TOMIO）

埼玉大学・教育学部・教授

研究者番号：10199507

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし